

「精神疾患あっても夢を」 マディソン市研修ツアー報告会



研修で得たことを報告する酒井さん、松本さん、匂坂さん（左から）

帯広市の国際姉妹都市で、精神保健分野の先進地米国マディソン市で7月に行われた、同分野の研修ツアーの報告会が22日、帯広市内のおおえメンタルクリ

ニックゆうで開かれた。帯広マディソン交流協会、大江病院、同クリニック主催。医療・福祉関係者ら約50人が出席し、研修に参加した松本綾さん（大江

病院看護師）、匂坂幸輝さん（同ソーシャルワーカー）、酒井一浩さん（同クリニック作業療法士）の報告に耳を傾けた。

マディソン市は精神障害者が地域で暮らすための包括的なシステムが整備され、同分野では「マディソン・モデル」として知られる。十勝管内の関係者は2003年から、同市での研修を続けている。

研修には道内外の関係者8人が参加し、同市のシステムを支える各機関の視察などを行った。松本さんは、同分野で言われるリカバリ（回復）の意味について、「精神疾患があっても、夢や希望を持つことだと感じた。病気は薬で抑えられても、夢や希望は人と人のかかわりの中でしか生まれない」と話した。

匂坂さんは日米の制度や文化の違いに触れ、「皆保険制度の日本では、入院している方が安いいし薬という心境になつてしまふ」と指摘。「今すぐマディソンと同じ

ことをするのは難しいが、日本流にアレンジして取り組み、地域で暮らすのが当たり前という意識にしておくことが重要」と述べた。今年で研修参加3回目の酒井さんは「マディソンに行かせてもらうのは本当に特別なこと。交流協会の活動があったからこそで、先輩たちに感謝したい」と話していた。（丹羽恭太）